中国における「歴史と私たち自身に向き合う」による教師への専門職能開発とそれに基づいた教育実践

―― 歴史的事例学習を通した道徳教育を目指して ――

原　口　友　輝

1．はじめに

本稿では，米国を拠点とする非営利団体「歴史と私たち自身に向き合う（Facing History and Ourselves，以下 FHAO）」が中国で行ってきた専門職能開発ワークショップと，そのようなワークショップを受講した教師が実際にどのような教育実践を行っているのかを明らかにする。そしてこれらの意義を検討することを通じて，我が国での道徳教育実践及び教師支援への知見を考察する。

FHAO はホロコーストをはじめとして「困難な歴史（Difficult Histories）」と呼ばれる歴史を取り上げるプログラムを開発してきた団体である。1976年に発足して以来，ホロコーストのみならずさまざまな「困難な歴史」に関する教材と指導法，専門職能開発セミナー・ワークショップを行ってきている。FHAO プログラムの効果については，これまで多くの研究によって指摘されてきた（Barr *et al*. 2015; Schults *et al*. 2001; Shin *et al*. 2021）。米国のみならず，南アフリカやルワンダ，北アイルランドなどの紛争後社会でも，現地の非営利団体と協力し専門職能開発を行い，成果をあげてきた（Freedman *et al*. 2008; 原口2010，2015；McCully and Reilly 2017; Shin *et al*. 2021; Tibbitts 2006; Tibbitts and Weldon 2017; Weldon 2015）。

筆者はこれまで道徳教育及び人権教育の観点から，主に FHAO の中心となる資料集『ホロコーストと人間の行動』[1]とその実践を検討してきた。FHAO の指導方法の特徴は，「スコープとシークエンス」と呼ばれる構成原理に基づいて，多様な諸個人・諸集団の選択と人間の行動の傾向性に焦点を当てる点にある。すなわち，諸個人の選択の検討を通じて，歴史的事例と自分との関わりを考えさせ，その作業を通じて自分たちのこれからの「選択」についてより深く考えるようになることを目指すものである（原口2007，2014）。我が国のこれまでの道徳授業は，必ずしも生徒に「多面的・多角的に考えさせる」ものとはなっていなかった。それに対し，FHAO プログラムは考えるための具体的な材料を豊富に提供することで，より多面的・多角的に考えさせることができる（原口2011，2014，2017）。また，FHAO の提供するワークショップやセミナーなどの専門

職能開発は，教師自身の「考え，議論する」経験につながり，その経験は教師の実践へとつながり得る（原口2019，2021）。社会科教育の観点からも，FHAO プログラムが生徒の知的のみならず情緒的な側面の関与を重視しながら将来の民主主義社会の市民を育成している点が高く評価されている（空2018，2022）。

このように，FHAO プログラムの方法と内容を取り入れることは我が国の道徳教育，社会科教育にとって意義があると考えられる。

しかしながら，FHAO のプログラムは，基本的には米国内の社会での問題を想定して開発・実践されている。もちろん「困難な歴史」をどう取り上げるかという点では，米国と我が国で共通する問題が少なからず存在する。しかしそれぞれ文化的・政治的には異なる点も多い。我が国での実践にあたっては，我が国の文脈にあったカリキュラム開発とそれを活用するための専門職能開発が行われる必要がある。

そこで本稿では，我が国で FHAO プログラムに基づいた教師支援を行うことを視野に入れつつ，隣国の中国での FHAO 実践に注目する。我が国と中国では，第二次大戦前後の「過去」について，立場が正反対であるとはいえ多くを共有している。地理的・文化的にも近く，同じアジア圏である中国でどのような専門職能開発が行われ，それを教師がどのように自らの実践に活かしてきたかを明らかにすることは，今後の我が国における実践の手掛かりになると考えられる。

以下ではまず，FHAO の概要と近年のアジア関連の活動を述べる。次いで，2019年に香港で行われたワークショップ，「『南京での残虐行為』を教える（Teaching *the Atrocities at Nanjing*）」と「エリ・ヴィーゼルの『「夜」を教える』への FHAO のアプローチ（A Facing History Approach to *Teaching Night* by Elie Wiesel）」（以下「『夜を教える』ワークショップ」）の構造と特徴を検討する。さらに，南京外国語学校における FHAO プログラムの実践と特徴をまとめる。最後に，我が国での実践に向けた知見を考察する。

２．FHAO の概要とアジア関連の活動

（１）FHAO の概要と特徴

FHAO は，究極的な目的として「歴史の教訓をもとに，教師と生徒が偏見と憎しみに立ち向かうこと」を掲げている。そのために，「歴史上の重要な瞬間における人種差別，反ユダヤ主義，偏見を取り上げ，生徒たちが過去の選択を自分たちの人生で直面するものと結びつけられるようにしている」という。

この目的のために，活動の初期から，プログラムの教育構成原理として，独自の「スコープとシークエンス」を開発してきた（図１左）。これは，「自分とは何か」というアイデンティティの考察から始まる。そして，集団の包摂／排除の問題を取り上げたうえで，それらの視点から歴史的事例を探求していく。さらに，その過去がこれまでどう記録・記憶されてきたのか，自分たち

は今後社会にどう参加していくのかといった問題を探求していく。このような一連の内容と展開を組み合わせた教授方法がFHAOの「スコープとシークエンス」である[2]。FHAOはこの「スコープとシークエンス」を適用するさまざまな「困難な歴史」に関連した教材と教授方法を開発してきた。

また，10年ほど前から[3]，教育目標として「歴史的・市民的理解のための教授学的三角形」を提示している（図１）[4]。これは，「知的厳格さ」「情緒的関与」「倫理的内省」で構成された三角形であり，中心に「見識のある市民的責任」（あるいは「市民の主体性」とも言われる）が位置している。すなわち互いに関連する知的側面，情緒的側面，倫理的側面を調和的・統合的に育成することによって，責任感をもった市民を育成しようとしている。

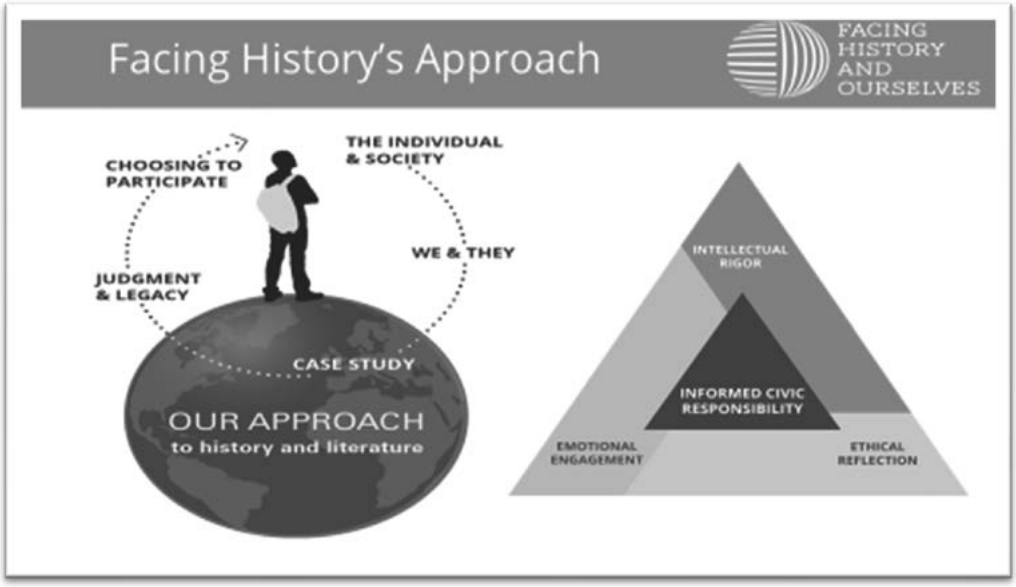

図１：FHAOの「スコープとシークエンス」（左）と「教授学的三角形」（右）

（２）FHAOにおけるアジア関連の資料の開発と専門職能開発活動

FHAOは2007年以降，中国に関連する資料集とティーチングガイドの開発や専門職能開発ワークショップ，セミナーの開催を行ってきた。たとえば資料集・ティーチングガイドに関しては，中国系移民を対象として以下のものが開発されてきた。

・*An educator's guide to Becoming American: THE CHINESE EXPERIENCE*（2003年）[5]

・*Teaching RED SCARF GIRL*（2009年）[6]

・『南京での残虐行為：戦争犯罪（The Nanjing Atrocities: Crimes of War）』（2014年）[7]

最後の「南京大虐殺」に関する資料集については，後述のように，これに関するワークショップが，米国内のみならず中国国内でも行われてきた。

また，１週間のオンライン・セミナーとして，以下のものが開催されてきた。

・“Exploring Crimes of War through the Nanjing Atrocities”（2016年４月）

・“Teaching World War II in East Asia”（2017年４月）

これらは「チャイナ・プロジェクト」と呼ばれるものの一環とされる。「チャイナ・プロジェクト」では中国におけるワークショップも開催しており，2018年までの時点で，500人の教師が参加したとされる。またFHAOプログラムを実践している学校は，少なくとも北京と南京で４校，上海で５校，深圳で１校，香港で３校とされる[8]。

近年では，2017年12月と2019年４月に香港で対面のワークショップが開催された。ファシリテータのフアン・カステラノス氏によると，2017年ごろから「チャイナ・プロジェクト」は香港を中心としていく方針に変更したという。それまでは北京や南京，上海で行っていたのを香港中心にしたのは，一つには南京等の諸都市が非常に大きく，ワークショップ後の実践のサポートが困難であるためである。まずは香港を拠点とした方が活動を展開しやすい。また，FHAOの資料がインターナショナルスクールの多い香港の空気にマッチしている。自由や民主主義，人権などの話題は，香港での方が議論しやすい。さらに，香港にはアジア・ソサイエティやホロコースト・トレランス・センターなど，協力してくれる団体がある。それらの団体は米国内にもあるため，連携がしやすい。もちろん中国本土でも手伝ってくれる者はいるが，たいていの場合常勤の個人の教師に手伝いをお願いすることになり，運営が難しい。以上を考え合わせると，確かに香港での開催の際にも中国本土からの参加者はいるのであるから，香港を中心として展開していくことは合理的である。しかし残念ながら，香港の政治的状況の変化と新型コロナウイルスの世界的な広がりにより，2020年度以降の対面活動は行われておらず，今後の見通しも立っていない。

その他，日系米国人に関連して，2018年に第二次大戦中の「日系米国人収容問題」関連の資料集『「マンザナーよさらば」を教える（Teaching *Farewell To Manzanar*）』[9]が開発され，それを活用するためのワークショップ「『マンザナーよさらば』ワークショップ：回想記を通して日系人収容を教える」[10]も開催されてきた。

３．香港における二つのワークショップの検討

それでは，中国においてどのような専門職能開発が行われてきたのだろうか。ここでは，2019年４月に香港で行われた二つのワークショップ，「『南京での残虐行為』を教える」と「『夜を教える』ワークショップ」の構造と特徴を，原口（2019）に基づき，①FHAOの「スコープとシークエンス」に基づいた展開，②背景情報の提示，③指導方法や学習活動の実践と参加者同士の交流の観点から論じる。

（1）「『南京での残虐行為』を教える」ワークショップ

「『南京での残虐行為』を教える」は，2019年４月25日に香港の Chinese International School において午前９時から午後４時まで実施された。これは FHAO の教授法と資料集『南京での残虐行為：戦争犯罪』の内容や活用の仕方を紹介するものである。基本的にはインターナショナルスクールで社会科を教える教師が対象とされていた。実際，香港のインターナショナルスクールの参加者が多かった。しかし，上海や南京など中国本土からの参加者も見られた。参加者は筆者を含め21名であった。筆者も参加者の一人としてワークショップに加わり，他の参加者と同じ活動をした。

ワークショップの指針となる問い，目標，当日の流れは，文末の資料１の通りである。

①「スコープとシークエンス」に基づいた全体の流れ

ワークショップ全体は他のワークショップと同様，FHAO の「スコープとシークエンス」に基づいていた。

最初は「個人と社会」がテーマとされ，「個人や集団のアイデンティティを形成する上で，歴史はどのような役割を果たしているのでしょうか」などが中心的な問いとされていた。この時，1956年生まれで文化大革命時代に成人した中国人作家ハ・ジンの過去について表現した詩をもとに，自分のアイデンティティと過去とのつながりを考える活動から始まったのが印象的であった。自分とは何かを考えるうえで自分の過去に目が向けられ，その後歴史の話に入っていくという自然な流れとなっていた。

次いで「新興国：中国と日本」では，日本と中国の間の「私たちとかれら」の関係についての動画「中国と日本：隣人，友人，敵対関係（China and Japan: Neighbors, Friends, Enemies）」を視聴した。

以上の二つのセクションは「スコープとシークエンス」の構成と完全に一致している。また内容に関しては，他のワークショップでもあったように，「個人と社会」及び「私たちとかれら」のセクションに相当する箇所で，既に「歴史」（あるいは「ケーススタディ」）のセクションで取り上げられる「南京大虐殺」前後の資料が用いられていた（原口2021）。少なくとも短期のワークショップでは，このように「歴史」以前のセクションで，関連する歴史的事例を用いてアイデンティティや集団の問題を探究するという方法が一般的であることが分かる。

次の「南京での残虐行為」のセクションは，明らかに「スコープとシークエンス」の「歴史」に対応している。ここではまず，日本の帝国主義がどのように「南京大虐殺」につながっていったかについて，現代中国の歴史研究者であるラナ・ミッター教授による動画「南京での残虐行為：戦争犯罪（The Nanjing Atrocities: Crimes of War）」を視聴した。そして，救援者や日本軍指揮官，兵士の視点を学ばせる方法の説明と，その一部を体験する活動があった。動画では，中国

のナショナリズムと日本の帝国主義の関係，そして補給がないままでの上海からの移動，指揮官の権威の不在と規律の著しい乱れ，兵士の構成，軍国主義教育，思いもかけない中国側の激しい抵抗への強い怒り，また中国側の指揮官の逃亡等々，多くの要因が残虐行為につながったと述べられている。ファシリテータも，短期間での移動，補給の不在，中国軍兵士が民間人の格好をして「安全区」へ逃げ込んだことなど，残虐行為につながった要因について説明を加えていた。このように，残虐行為を非難するよりも，なぜ，どのようにしてそれが生じたかに焦点が当てられていた。なお，このセクションに入ったのは午後２時を回っており，そのせいもあってか，これまでと比べて参加者の体験活動は少なめであった。

最後に，「裁判（判断），遺産，記憶」のセクションにおいて，東京裁判などのビデオ視聴に基づき事実確認などが行われた。日本側の謝罪が韓国内でほとんど取り上げられていない，とファシリテータが言っていたことが印象に残っている。このセクションは時間にして30分程度であった。残り時間が少なかったためであろう。

②背景情報の提供と多様な情報源の提示

文末資料１からも分かるように，ワークショップは「南京大虐殺」だけでなく，その前後の歴史的情報やその時代の人々，そして研究者による分析など，多様な情報源が提示・活用されるものとなっていた。たとえばマイケル・デビッド・クワンの体験記からは，日本占領下の北京がどのような雰囲気にあったかを知ることができる。また，終戦時の思いをつづった大江健三郎の文章からは戦時下の子どもの様子をうかがうことができる。実際，大江健三郎の文章に対して，参加者からは「当時の日本側の視点を知らなかったから珍しかった」との感想が聞かれた。さらに日本と中国の関係を素描した動画からは，日本と中国がどのような隣国関係を歩んできたのか，そして日本が当時の「列強」のはざまでどのような路線を行こうとしていたのか，それが「南京大虐殺」にどのようにつながっていったかを理解することができる。先述の動画「南京での残虐行為：戦争犯罪」では，「南京大虐殺」につながったさまざまな原因が分析されている。

一方で，「南京大虐殺」自体についての活動は思っていたより少なかった。時間にして全体の４分の１ぐらいである。これは前半の活動に時間が費やされたこともあるだろうが，「南京大虐殺」に至る背景についての情報を多く提供しようとするFHAOのスタンスの表れでもあると考えられる。既に述べたように，「南京大虐殺」自体の取り上げ方についても，その残虐性を非難するのではなく，それが生じたプロセスを理解させようとしていた。

また，「南京大虐殺」を扱う一つの方法として，外国人及び中国人の救援者，日本の指揮官の状況，兵士の証言など，多様な個人の視点を取り上げている方法が紹介されていた[11]。多様な個人の視点を取り上げようとするのはFHAOの方法論の特徴である。後日のインタビュー時に，ワークショップのファシリテータであるフアン･カステラノス氏は，「日本人側にも虐殺に抵抗したり

中国人を助けたりした人がいたはずだから，その情報が欲しい」と述べていた。実際，現地の外国人や中国人のみならず，日本人の救援者，抵抗者の証言があれば，諸個人の証言はより多様性を増す。

以上のように，ワークショップは歴史的背景と多様な諸個人の証言が多く紹介されるものとなっていた。

③多様な指導方法や学習活動の実践と参加者同士の交流

ワークショップには，以下のように多くの学習活動が盛り込まれていた。

・資料集『南京での残虐行為』で気づいた点やワークショップに参加した理由を共有するアイスブレイク
・ハ・ジンの詩の印象に残った部分を一人ずつ読み上げるラップ・アラウンド活動
・自分とは何かを考えるアイデンティティ・チャートの作成
・全体で別々の文章を読みグループで内容を確認した後で，違う文章を読んだ者同士ペアになって互いの内容を共有するジグソー法の変型版（ペア・シェア）
・孫文もしくは橋本欣五郎の演説文の言葉のみを使用して詩をつくるファウンド・ポエム
・映像を視聴したり文章を読んだりした後で発見や疑問点を書き出すジャーナル･リフレクション

その他，グループや全体での共有などは随時行われていた。いくつか印象に残ったことを述べておく。第一に，アイスブレイクの際，ファシリテータは，「扱うのが困難な歴史なので，学習のためのコミュニティを作る必要がある」ということを強調していた。学習のためのコミュニティを作るというのは他のワークショップでも言われていたことであり，FHAO 重要な方法論の一つである（原口2019）。

第二に，アイスブレイクの際に最初に話した相手は，資料集『南京での残虐行為』の目次の構成で気づいたことについて，「一次資料がある」ことを挙げていた。その参加者は歴史の教師であるから，一次資料があることは大変助かるとのことであった。

第三に，ファウンド･ポエムでは，グループで一つの詩とそのタイトルを考えて模造紙に書く。その際に，別々の文章を読んだグループ同士であるにもかかわらず，同じタイトルをつけたところがあった。これにより，それぞれの文章に共通する要素が浮かび上がる結果となっていた。参考までに，筆者のグループが作成した「詩」を図２に示す。

第四に，別々の文章を読む同様の活動で，ペアになって互いの内容を共有する前に，同じ文章を読んだグループ内で内容を確認する活動があった。こうしておくと事前に自分の理解の確認ができて，異なった文章を読んだペアに説明する際にやりやすくなると感じた。

第五に，休憩中に話した参加者は，このワークショップについておおよそ次のように述べてい

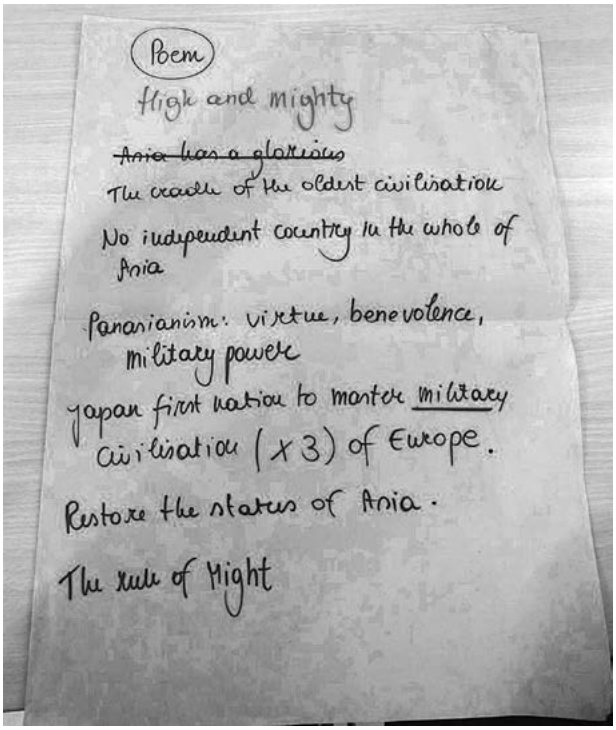

図２：筆者のグループがファウンド・ポエムの活動で作成した孫文の演説についての「詩」

た。「洗脳のような教育を行っていたことなど，戦時中の日本側の視点を知らなかったから珍しかった。自分は親の世代と感じ方が違う。自分の世代はもっと歴史を客観的に見ることができる」。被害者側の視点はもちろん，加害者側の視点を知ることの意義を体験しておく機会は，自身の実践における生徒の学習を構想するうえで重要である。

（２）「エリ・ヴィーゼルの『「夜」を教える』への FHAO のアプローチ」ワークショップ

本ワークショップは，エリ・ヴィーゼルの代表的なホロコースト文学『夜』[12]とそのためのティーチングガイド[13]を活用するためのものである。ワークショップは「『南京での残虐行為』を教える」の２日後の４月27日にアジア・ソサイエティ香港センターで，同じく９時から４時まで実施された。香港ホロコースト・トレランス・センターとの共同であり，午後には１時間弱ほど，同研究者により講演が行われた。それ以外は FHAO のファシリテータが中心に進めていた。社会科や歴史の教師だけでなく英語の教師の参加も多かった。これは『夜』が英語の教材としても用いられるためであろう。参加者は，筆者を含め28名であった。ワークショップの目標と学習活動，学習内容等は文末の資料２の通りである。

①「スコープとシークエンス」に基づいた全体の流れ

本ワークショップも，「スコープとシークエンス」に基づいて構成されていた。

最初は，オルテガの「私とは，私と私の環境である」という言葉について参加者自身について考えさせたうえで，少年時代のヴィーゼルのアイデンティティと周辺環境について考えさせる展開となっていた。これは参加者自身からヴィーゼルへと，自然に視点を移すような展開であった。

次の「歴史的文脈」では，戦前のハンガリーのユダヤ人の写真やその後の状況など，『夜』の歴史的背景が取り上げられていた。ヴィーゼルの出身地であるシゲトについての写真を見た後ファシリテータのカステラノス氏は，「このようにかれらの生活を知るのは，ユダヤ人を単なる『犠牲者』としてくくって見ないために重要である。かれらはサッカーをしていた。スキーも。でも『夜』の中での生活描写は一面的なので，それだけだとかれらをステレオタイプ化してしまう恐れがある」と述べていた。

また，ここでは，残された日記についてのドキュメンタリー動画（I'm Still Here）が取り上げられたり，香港ホロコースト・トレランス・センターのサイモン・リー氏による日記についての講演が行われたりするなど，回顧録的な小説である『夜』と同種の資料が取り上げられていた。「ホロコーストは単に収容所やガス室の話になってしまっているが，実際には病気や飢えで亡くなった人も多かった。だから個人の日記を読むことが大事である」，とするファシリテータの話が印象に残っている。これはもちろん『夜』自体のもつ意義にも共通している。

この「歴史的文脈」のセクションは，通常なら「個人と社会」に続く「私たちとかれら」のセクションよりも，「ケーススタディ」（「歴史」）のセクションに近いように見える。つまり「私たちとかれら」のセクションをとばしているようにも見える。とはいえ，『夜』の内容にはまだ入っておらず，したがって「ケーススタディ」の前の段階である。その意味ではやはり「スコープとシークエンス」に沿った展開といえる。

続く「アウシュビッツ・ビルケナウ」は「ケーススタディ」のセクションに相当している。ここでの中心的な問いは「アウシュビッツとは何だったのか，そしてそこに連れて行かれた人々にとってアウシュビッツとは何を意味したのかを理解するために，ヴィーゼルの記述はどのような洞察を与えてくれるのでしょうか？」となっている。すなわち，『夜』はアウシュビッツを理解するための一つの材料として取り上げられている。

最後の「記憶と責任」は，「スコープとシークエンス」の「裁判（判断），記憶，遺産」と「参加を選択する」のセクションに対応している。ヴィーゼルが講演で読者に他の本を読み続けてほしいと述べている内容は，読者の責任を示している。またベンジャミン・フェレンツについての動画は，強制収容所で戦犯裁判のための証拠を集めた彼のその後の選択を表している。ワークショップとしては，一個人の選択を示すことで参加者が自分の選択について考えさせる内容で終わる構成となっている。なお，最後の二つのセクションがまとめられるのは，短期間のワークショップ

においてよくあることである（原口2019，2021）。

②背景情報の提供と多様な情報源の提示

既に示したように，本ワークショップは『夜』の背景情報を提示することによって『夜』の解釈について考えさせるものであった。作品に描かれていたヴィーゼルの少年期の生活や居住地の情報，ハンガリーのユダヤ人の状況，あるいは別のユダヤ人の経験などである。同時に，ワークショップは『夜』を手掛かりにして，ホロコーストを理解させようとするものでもあった。「アウシュビッツ・ビルケナウ」のセクションにおける問いは，このスタンスを端的に表している。

また，ワークショップは『夜』と同種の資料である日記を複数用いてヴィーゼルの経験を比較する視点を与えているものでもあった。比較対象があった方が，ヴィーゼルの経験の意味を解釈しやすくなる。

ヴィーゼル自身の講演内容と，大規模な残虐行為の防止に尽力する人物のドキュメンタリーが最後に提示されているのも，『夜』を踏まえて，そこでの悲劇が繰り返されないようにするためにどのような「選択」があり得るのかを考察する手掛かりとなるだろう。

このように，本ワークショップでは，『夜』の背景情報や情報源が提示されていた。一方で，本ワークショップ全体を通して『夜』自体に直接関連する内容は少なかった。これについては後述のように，数名の参加者が「改善点」に挙げていた。

③指導方法や学習活動の実践と参加者同士の交流

本ワークショップは，先のワークショップ「『南京での残虐行為』を教える」より，学習活動の幅が狭かった。アイスブレイクやヴィーゼルのアイデンティティ・チャートの作成，ジャーナル・リフレクションなどはあったものの，ほとんどがペアやグループ内で話し合い，全体で共有という学習活動であった。

この点はファシリテータのカステラノス氏も後のインタビューにおいて述べていた。もう一回やる場合，今回のワークショップで変えたいところはあったかを聞いた際，氏は，「今回は同じグループ内で話す活動だけになってしまい，多様な教授法を使いきれなかった」，と述べていた。そのようにした理由として，『夜』をまだ読んだことのない参加者が複数いたこと[14]，歴史の教師だけでなく言語の教師も混ざっていたことを挙げていた。「『南京での残虐行為』を教える」の方には高校の歴史教師が多く参加していたため，ファウンド・ポエムなどの活動ができたとのことである。そこで本ワークショップでは，「スコープとシークエンス」と FHAO の教授目標の三角形に焦点を当てたという。特に，教授目標の三角形の視点は『夜』を理解する際に重要だと考えた，とのことであった。

確かに，残酷なシーンを含む動画（I'm Still Here）視聴後のジャーナル・リフレクションとし

て，知的反応，感情的反応，倫理的内省の三つの側面から考えたこと，感じたことを記入する活動は，興味深かった。感情的な側面から感想を抱かせるだけでなく，冷静に考えるという作業も行わせていたためである。これは情緒的になりやすい事実に直面した際に思考を停止させない方法として有効であろう。アウシュビッツの写真を見た際に，「見る―考える―疑問を抱く（See-Think-Wonder）」という学習活動（ジャーナル・リフレクションの一種）を行った際も同様である。

その他，進行や参加者同士のやり取りで印象に残ったことを述べる。第一に，「『南京での残虐行為』を教える」と同様，アイスブレイクの際に学習のためのコミュニティを作ることの重要性が述べられていた。

第二に，話し合う活動は多かったため，参加者同士の興味深い会話を聞くことができた。一例を挙げると，「歴史的文脈」のセクションにおいて「ホロコーストの六段階」に関する資料を読んだ際，グループ内では次のような会話が交わされた。

「全員（全世界）のユダヤ人を殺すというのが衝撃だった。」

「なぜヘイトが始まったのか。それがどうやって広がっていったのか，疑問に思った。」

「一度スタートするとシステムになって，最初の頃のことは忘れられていく。官僚制のようなものだろう。これはやることになっているからやる，のように進められてしまう。」

「なぜ誰もが虐殺に無関心だったのだろうか。」

「自分はヴィーガン（完全菜食主義者）ではないが，家畜を殺すのと同じで，疑問なんて持たなくなるのだろう。」

第三に，「アウシュビッツ・ビルケナウ」のセクションにおいて，『夜』の34ページの詩（Never shall I forget...）を読んで最も心に残った一文を選ぶ際，筆者は“Never shall I forget the small faces of the children whose bodies I saw transformed into smoke under a silent sky.”を選んだ。それに対し他の参加者が，“silent sky”という表現から，「子どものことなど誰も気にしてなかったように見える」と言っており，興味深かった。ワークショップで以上のような会話をしておくことで，後に自分が授業でホロコーストについて生徒に学習させる際の準備となるだろう。

第四に，ドキュメンタリー動画（I'm Still Here）には残酷な映像も含まれていたが，カステラノス氏は視聴前に「通常は生徒に見せないが，今日は大人の集まりなので見せる」と述べていた。また動画の視聴後に，このような映像を生徒に見せるかどうかについて全体で話し合いになった際，氏は「自分は昔ホロコーストやその他の大虐殺ばかりを生徒に熱心に教えていたが，生徒はやがて無関心になり，シニカルになっていってしまった」[15]と述べ，残酷な写真や映像の取り上げ方について細心の注意を払うよう暗に伝えていた。これはFHAO全体のスタンスでもある。

（3）参加者による二つのワークショップの評価

参加者はワークショップについてどう感じたのだろうか。どちらのワークショップにおいて

も，最後にFHAOの方から「ワークショップの評価（workshop evaluation）」の紙が配られた。「『南京での残虐行為』を教える」について16名，「『夜を教える』ワークショップ」について23名が回答していた（筆者の回答を除く）。そこには参加者の情報の他，三つの項目があった。以下便宜上，「『南京での残虐行為』を教える」を（A），「『夜を教える』ワークショップ」を（B）と略記する。

まず「本ワークショップの強み」については，両ワークショップとも，多くの参加者がファシリテーションと資料（及びその配列），教授方法，問いかけなどを多数挙げていた。また，（A）では少なくとも２名が，（B）では５名が，明示的に「他者との交流」を挙げていた。資料や教授方法のみならず，参加者同士の交流も有意義と感じられていたことがうかがえる。

一方で「改善点」について，（A）（B）ともに少なくとも４名が「より長いワークショップ」と記入していた。「一日のワークショップにあまりにも多くの内容が詰めこまれていた」「少なくとももう一日欲しい」とのことである。また，（A）について「南京大虐殺」自体の内容をもっと知りたいという記述があった。（B）についても，３名が『夜』自体の内容をもっと取り上げてほしいと記入していた。『夜』の教授法をもっと取り上げてほしい，というものもあった。さらに，少なくとも５名がサイモン・リー氏の「講義」を「改善点」として記入していた。ただしこれは，参加者がFHAO的なワークショップを期待してきたためもあろう。また参加者に言語関連の教師が多かったことも一因であろう。

「自分の仕事で使える知見（資料，教授方法等）が，何か得られたか」という質問に対して，「はい」と答えた者は，（A）では全員であり，（B）では21名であった（残りは，無回答１名，不明が１名）。ほぼ全員の参加者がワークショップを有意義に感じたようである。

（４）インタビューから

それでは，ファシリテータはこれらのワークショップについてどう感じたのだろうか。「『夜を教える』ワークショップ」の次の日に，今回の二つのワークショップをふり返ってどうだったか，中国本土でのワークショップと比べてどうだったか，また米国でのワークショップに比べてどうだったかについて，カステラノス氏にたずねた[16]。

まず，二つのワークショップについて，「『南京での残虐行為』を教える」の方はおおむね想定通りに進んだとのことであった。一方で，既に述べたように「『夜を教える』ワークショップ」の方では，多様な教授方法を使いきれなかったと述べていた。いずれにしても，ワークショップの目標は達したと思うとのことであった。

中国本土と香港での違いについては，次のような内容を述べていた。中国本土では，教師は教授方法に興味をもっていた。教室では教師が話すだけという方法が用いられていることが多かったため，多様な教授方法は興味深く受け取られた。また，政治上の問題から，あまりセンシティ

ブな内容は取り上げにくいということもあり，教授方法に焦点を当てざるを得ない面もあった。一方，香港では教授方法だけでなくコンテンツや考え方にも焦点を当てられた。香港の人々は人権や民主主義の考え方について強い興味をもっており，その意味でやりやすかったそうである。

ただし，筆者自身の体験から，授業や政治上の相違だけでなく，言語の違いもあっただろうと考えた。推測になるが，中国本土の教師は香港の教師に比して英語でのやり取りや思考に慣れていない。そのため，内容について深い議論をしにくい面があったのではないか。実際，二つのワークショップに参加していた上海からの参加者は，休憩中に，英語と中国語（母国語）とでは，考える内容や思考の仕方が全然違ってくると述べていた。これは筆者自身も常々感じるところである。言語が変わると思考方法・内容も変わる。そのことをカステラノス氏に伝えると，それもあるだろうと述べていた。あわせて，いろいろな国に行ったことのある外国人教師の参加が多かったことも関係があっただろうとも述べていた。

また，香港と米国での違いについては，「ほとんど感じられなかった」とのことであった。むしろ，ワークショップの会話の中でトランプ政権への批判なども出てきて驚いたそうである。「ニューヨークとテキサス州の方が違うのではないか」とも述べていた。

今後も香港でワークショップを行っていく予定とのことであったが，その後の政情の変化と新型コロナウイルスの蔓延のため，再開の見通しは立っていない。2021年３月に改めて尋ねたところ，当面中国での教師に対しては個別にオンラインでのやり取りを通して支援を行っているとのことであった。

４．南京外国語学校における FHAO 実践

（１）南京外国語学校における選択コース

FHAO の専門職能開発を受講した教師は，中国でどのような実践を行っているのだろうか。ここでは江蘇省南京外国語学校での実践を取り上げる。

同校では2010年９月から，第10学年の英語の選択コースとして FHAO プログラムを導入している。年間で90分の授業が20時間程度行われる（＝40コマ）。毎年１クラス二十数名（上限は26名前後）の生徒が受講する。授業は完全に英語で行われ，受講を終えると FHAO による「選択コース修了証」も与えられる。2015年からは，先述の FHAO の資料集『南京での残虐行為』（2014年出版）を活用している。また，カリキュラム外でも，南京大虐殺記念館への訪問，ホロコースト生存者へのインタビュー，国際的に著名な学者による講演会や，「南京大虐殺犠牲者国家追悼日」における英語版ラーベの日記の朗読などの活動が行われているという。

2012年３月には FHAO スタッフでインターナショナル・ディレクターのカレン・マーフィー氏とプログラム・ディレクターのディミトリー・アンセルム氏が来訪し，FHAO の選択コースを持つこの学校を「モデル校」とみなしたという[17]。「修了証」が与えられる点と考えあわせても，

FHAO から高い評価を得ているコースと言えよう。

筆者は，同校の FHAO コースの教師である尚媛媛氏から，いくつかの授業資料（2019年度及び2020年度）と一部の生徒の課題作文，そして尚氏と同僚とによる論文（周＆尚2019）を譲り受けた。

詳しい分析は他日を期したいが，概してそれらの資料からは本コースが FHAO プログラムの特色を活かしていることがうかがえる。たとえば，コースの目的は次のように述べられている。「このコースの目的は，単に生徒が歴史の知識を身につけることではなく，より重要なのは，人間の過去を理解することを通して，自らの歴史意識や歴史の解釈を生成し，歴史的思考力を伸ばし，歴史と社会を理解する方法を身に着けられるようにすることである」（周＆尚2019：三１para.3）。また，歴史のみならず現在の社会問題も多く取り上げられるという。「このコースのメインテーマは，歴史と現在の社会問題を結びつけることなので，“Breaking News”のセクションもある。これは文字通り，コースに入ってくる最新のコンテンツを一時的に差し込むものである。2019年3月21日の選択コースでは，3月15日にニュージーランドで発生したモスク銃撃事件をさしはさんだ。皆で一緒にニューヨークタイムズ紙の二つの文章を読み，Nationalism, White Supremacy, White Extremist（ナショナリズム，白人至上主義，白人過激主義）等の一連の概念について討論，分析し，歴史上の事件と，今日発生しているこれらの類似の事件の背景にある，さまざまな社会的・政治的問題及び人間的な問題を考察した」（周＆尚2019：三１para.2）。つまり，歴史的知識の習得のみならず，歴史的思考力等を身に着けさせたうえで，歴史的事例と現在の社会問題とを関連させて理解させることが目指されている。

カリキュラムも，中国の国情や南京外国語学校の生徒の特徴に合わせて，「個人と社会」「私たちとかれら」「同調と服従」「ホロコーストと南京大虐殺」「傍観者と救援者」「参加を選択する」という構成となっている。これも FHAO の「スコープとシークエンス」（及び資料集『ホロコーストと人間の行動』の構成）に沿っている。さらに，学習内容・活動についても，フランク・タシュリンの『ぼくはくまですよ』[18]を教材化した資料や，アイデンティティ・チャートの作成，「義務の領域」を考える活動など，FHAO で定番の教材・活動が見受けられる。

実際の授業はどのように進むのだろうか。筆者が譲り受けた「傍観者と救援者」と題する授業（90分２回）では，救援者について次のように進められていた。まず，「知っている人を助けるのと，知らない人を助けるのとでは，何が違うのでしょうか？」「知っている誰かを救助することを拒否することと，見知らぬ人を助けることを拒否することとの違いはありますか？」といった問いが投げかけられる。そして「義務の領域」について考える活動をしたうえで，ジョン・ラーベの行動について詳細に描写した FHAO の教材が取り上げられ，「ラーベが直面したジレンマとは何か？」「ラーベはなぜ人命救助のために残ることを決意したのか？」といった問いかけや，「ラーベの動機を裏付ける詳細な情報を見つけましょう」といった指示がなされる。さらに，“Pigeon”[19]

というFHAOの動画が視聴され，動画の描写や登場人物のアイデンティティ，救援の動機などについて話し合いがなされる。そのうえで，「救援に至るまでの動機」として，「功利主義」「利他主義」「人間の瞬間（Human Moment）」といった用語と考え方が提示されている。救援者の選択について深く掘り下げている様子がうかがえる。

また，新型コロナウイルスでオンライン授業を余儀なくされた2020年２月には，生徒に対して次のような英語の作文課題が出された。

「自宅待機中に，あなたはこの流行について何かを目撃したり，経験したり，印象的なことや変わったことをしたはずです。その話を書き留めて，この特別で歴史的な瞬間に『人は選択をし，選択は歴史を作る』という新しい理解を分析してください。」

この課題に対し生徒たちの作文では，コロナウイルスに対する，人々や中国及び国際社会の選択と自分自身の選択について，小さな選択であってもそれらが歴史を作っていくという考えが示されていた。筆者にとって特に印象的だったのは噂に関する作文で，間違った噂は混乱につながり，場合によっては責任のなすりつけ合いに，さらには暴力にまで発展する。だから一人ひとりがそのような噂に流されずに協力し合っていけば，そちらの方向に歴史が作られていくというものである。ここには偏見等が暴力につながるというFHAOの基本理念が見られる。と同時に，この課題自体及び閲覧した作文から，このコースが人々及び生徒たち自身の選択について考えることを重視していることがうかがえた。

（２）南京外国語学校におけるFHAO実践の意義

以上のような南京外国語学校での実践で，我が国での実践の観点から興味深いのは次の四点である。

第一に，歴史や道徳関連の授業ではなく，英語の教科で行われている点である。細かな歴史的事実のみを取り上げるのではなく，人々の選択に焦点を当てるという，FHAOの理念と特長を生かしたコースとなっている。先に，香港でのワークショップに関するインタビューにおいて，中国本土では教授方法に焦点があてられる傾向があったと述べた。しかし，南京外国語学校での実践を見る限り，教授方法だけでなく，内容においてもFHAOの特長が生かされているといえる。このような実践が可能なのは，次の理由によると考えられる。まず，これが歴史や社会の授業ではなく英語の授業であるため，内容の自由度が高い。また，英語の授業であるがゆえに，中国においてもFHAOの資料をそのまま活用することができる。さらに，それができる生徒と教師がそろっている。いずれにせよ，我が国での道徳教育においてFHAOの方法と内容を活用する際には，道徳科と社会科のみならず英語科との連携も検討されるべきであろう。

第二に，ホロコーストの内容のみならず，生徒にとって身近な南京の話題が盛り込まれている点である。ジョン・ラーベは，もちろん南京では非常によく知られた救援者である[20]。ホロコース

トの救援者だけでなく，自分たちにより身近なラーベの活動を詳細に取り上げ，それを入口として救援者の活動を考えさせる展開は，救援者（と傍観者）の選択について理解させるうえで，効果的であると考えられる[21]。

第三に，上の二点とも関係するが，生徒自身の選択の重要性について考えさせるものとなっている点である。筆者が入手した資料を見る限り，南京外国語学校のコースはほかのFHAO実践と比べ，「私たち自身に向き合う（Facing Ourselves）」の活動に，より重点が置かれているように見える。そのことは，救援者について深く取り上げられていることや，授業内で「道徳的な選択をすること」が繰り返し強調されていること，「人は選択をし，選択は歴史を作る」というFHAOのフレーズに基づいた課題が出されていることなどからうかがえる。すなわち，生徒が「より良い選択をする」ことに対する，未来に向けた強い志向性が感じられる。この点は，このコースの特徴であると考えられる。ただし，現在までに入手した資料は限定的であり全体像がまだ明らかではないため，今後より詳細な調査・検討を必要とする。

第四に，「南京大虐殺」が生じたプロセスや原因に焦点が当てられていることである。コースでは，FHAOによる動画，「中国と日本：隣人，友人，敵対関係」や「南京の残虐行為：戦時中の犯罪」における解説等が取り上げられ，日本の加害行為への非難よりも，どのようなプロセスで，なぜ，このような残虐行為が起こったのか，そして同種の残虐行為の再発を未来にわたってどのように予防していくのかに焦点が当てられている。FHAOコースを実践している周氏と尚氏は述べる。「この悲劇の発生，大惨事の記憶は，今日，決して中日両国の距離を縮めてはいない。だから，今，優先すべきことは，なぜ大虐殺が起こったのか，どのように避けるかを明確にすることである。そのことは，中国と日本だけでなく，世界の他の国々にとっても重要なのである」（周＆尚2019：二 para.3）。大虐殺を道徳的に非難することはそれ自体重要である。しかしある意味でそれは，感情的な非難にとどまり，その出来事に対する生徒の知的な思考を停止させてしまうことになる。それに対し，プロセスや原因を検討させることで，生徒の思考を促すことにつながる。この点は，立場が正反対の我が国にも通じるものであると考えられる。

5．おわりに

本稿では，FHAOが中国で行った二つのワークショップ，「『南京での残虐行為』を教える」及び「『夜を教える』ワークショップ」と，南京外国語学校でのFHAOコースの実践を明らかにした。両方のワークショップFHAOの「スコープとシークエンス」に基づいて展開されており，「南京大虐殺」と『夜』の背景情報や指導方法を提供するものであった。と同時に，歴史的な背景だけでなく，多様な個人の物語にも注目するものであった。

他のワークショップと同様，教師はこれらの歴史的事例自体とその背景を，「スコープとシークエンス」と多様な教授方法を通して学ぶことができる。また学習者として互いに考えを共有する

ことによって，生徒の視点を学んでおくこともできる。このような経験は，教師がこれらの「困難な歴史」を取り上げる際の基盤となるであろう（原口2019，2021）。

南京外国語学校での実践からは，次の三点の知見が得られる。第一に，出来事の背景とそこでの個人の選択に焦点化することの意義である。特に「南京大虐殺」の場合，犠牲者の総数や戦後補償についてなど，論争的な話題に焦点を当てると，我が国では教育の文脈を越えた政治的な議論に巻き込まれてしまう。いずれかの学校段階でそれらの話題を取り上げることはもちろん検討されてよい。他方で，教育実践において，どのようなプロセスで，なぜ残虐行為が起こったのか，そこでの諸個人はどのように行動していたのかに焦点を当てる方法は，「困難な歴史」を取り上げる際の有効な方法の一つと考えられる。

また第二に，生徒自身のこれからの選択に焦点を当てていくことの意義である。筆者がこれまで見てきたFHAOの単元やワークショップ，セミナーでは，「歴史に向き合う（Facing History）」活動に多くの時間が割かれていた。しかし歴史における事実に学びつつ，それだけにとどまらずに，自分たちの選択についても考えさせていくところまで学習を進めることが重要である（「私たち自身に向き合う（Facing Ourselves）」）。ホロコーストや「南京大虐殺」それ自体を深く学習させつつも，その学習を通して未来の選択に注目させていくこと。我が国の文脈で，歴史と未来のバランスをどのようにとるかの見極めが重要である。

第三に，既に述べたように，南京外国語学校では英語のコースでFHAOプログラムが実践されていた。そこでの実践は，英語教育でありながら歴史教育（社会科教育）でもあり，さらには生徒にこれからの選択を考えさせていくという点で，道徳教育であった。このように語学と歴史の学習が道徳教育につながっているという点は，我が国での実践を考えるうえで意義深い。中学校段階における社会科と道徳科や，高等学校段階における地理歴史と公民だけでなく，外国語や国語との連携を通じた道徳教育を構想していくことが可能である。その具体的な在り方については今後の課題としたい。

謝辞：本論文はJSPS科研費JP18K13180の助成を受けたものです。本論文の作成にあたり，忙しいなか貴重な資料を提供してくださった尚媛媛氏とJuan Castellanos氏に深く感謝申し上げます。

註

[1] 以下，Facing History and Ourselvesの出版物は「FHAO」と略記する。FHAO, *Facing History and Ourselves Resource Book: holocaust and human behavior*, Brookline, MA: Facing History and Ourselves National Foundation, 1994. FHAO, *Holocaust and Human Behavior, Revised edition*, Brookline, MA: Facing History and Ourselves National Foundation, 2017.

[2]「スコープとシークエンス」について，詳しくは原口（2007），空（2022）を参照。

[3] 具体的な時期ははっきりしない。筆者の知る限り2008年の段階では提示されていなかったが，2013年初頭にはHP上で提示されていた。

[4]「『夜を教える』ワークショップ」で提示されたものである。

[5] FHAO, *An educator's guide to Becoming American: THE CHINESE EXPERIENCE*, Facing History and Ourselves National Foundation, Inc. and Public Affairs Television, Inc., 2003.

[6] FHAO, *Teaching RED SCARF GIRL*, Facing History and Ourselves, Inc., 2009.

[7] FHAO, *The Nanjing Atrocities: Crimes of War*, Facing History and Ourselves, Inc., 2014.

[8] 筆者が2018年８月に FHAO の HP 上で入手したニュースレター "THE CHINA PROJECT" より。このニュースレターの作成・提示された日は不明である。現在では HP 上でも削除されている。

[9] FHAO, *Teaching FAREWELL TO MANZANAR Created accompany the memoir by Jeanne Wakatsuki Houston & James D. Houston*, Brookline, MA: Facing History and Ourselves, Inc., 2018.

[10] 初回が2019年２月にニューヨークで開催，その後ロサンゼルスなどでも開催されてきた。この「『マンザナーよさらば』ワークショップ」については拙稿で論じた（原口2021）。

[11] ジグソー法のように，通常はグループごとにそれぞれ別々の文章を割り振って発表させていく形をとる，と言われていた。

[12] Elie Weisel, *Night*, Hill & Wang, 2006. エリ・ヴィーゼル著，村上光彦訳『夜［新版］』（みすず書房，2010年）。

[13] FHAO, *Teaching NIGHT Created to accompany the memoir by Elie Wiesel*, Facing History and Ourselves, Inc., 2017.

[14]「事前に『夜』を読んでおくこと，あるいは再読しておくこと」は本ワークショップ参加の条件となっていた。FHAO のワークショップはすごくよかったと知り合いから聞いて申し込んだという参加者は，「数日であわてて読んだよ」と言っていた。

[15] ただし，後日インタビューでこの時の話について質問したところ，実際は残酷な写真・映像等を何時間にもわたって取り上げた経験はなく，ワークショップではかなり誇張して話したと述べていた。今現在そのようにしている教師がいるかもしれないため，そうした教師への配慮だったそうである。

[16] 録音などはせず，その場でメモを取る形で記録した。不明瞭なところは後日メールでのやり取りで確認した。したがって，本稿での内容はすべて筆者による表現である。

[17] 初年度は16名，２年目は26人の学生が終了証を手にした。http://www.nfls.com.cn/0e/14/c310a3604/page.htm（2022.1.6）

[18] Frank Tashlin, *The Bear That Wasn't* (1946; reprint, Dover Publications, 1962). フランク・タシュリン文・絵，小宮由訳『ぼくはくまですよ』（大日本図書，2018年）。内容は FHAO の HP で見ることができる。https://www.facinghistory.org/holocaust-and-human-behavior/chapter-1/bear-wasnt（20221.10）５分程度の動画にもまとめられている。https://www.facinghistory.org/resource-library/video/bear-wasnt（2022.1.10）

[19] これは，第二次大戦中，子どもにパチンコで狙われていたハトを助けようとした結果，身分証（偽造）を盗まれて窮地に陥ったユダヤ人男性を，別の女性がより大きな危険を冒して助ける，という実話に基づいた10分程度の映画である。視聴には FHAO のアカウントが必要である。https://www.facinghistory.org/resource-library/video/pigeon（2022.1.6.）

[20] 尚氏に確認したところ，生徒たちはコースを受講する前からラーベについて多くを学んでおり，南京の生徒は全員かれを知っているだろうとのことであった。

[21] なお，コース全体で「南京大虐殺」について少なくとも４授業（６時間）が費やされるとのことである。

参考文献

Barr, D. J., Boulay, B., Selman, R. L., Mccormick, R., Lowenstein, E., Gamse, B., and Leonard, M. B. (2015) "A Randomized Controlled Trial of Professional Development for Interdisciplinary Civic Education: Impacts on Humanities Teachers and Their Students," *Teachers College Record*, 117, 2015.

Freedman, S. W., Weinstein, H. M., Murphy, K., and Longman T. (2008) Teaching History after Identity-Based Conflicts: The Rwanda Experience, *Comparative Education Revie*w, 52(4), pp. 663–90.

原口友輝（2007）「人権教育の指導方法に関する一考察―『歴史と私たち自身に向き合う』プログラムの検討を中心に―」関東教育学会編『関東教育学会紀要』第34号，pp. 66–8。

原口友輝（2010）「『移行期の正義』論における教育の位置―『歴史と私たち自身に向き合う（Facing History

and Ourselves)』の事例を中心に―」，『教育学研究』第77巻第１号，日本教育学会，pp. 15-24。
原口友輝（2011）「『歴史と私たち自身に向きあう』プログラムによる道徳教育の可能性―『思考』と『判断』の観点から―」，『学校教育学研究紀要』第４号，筑波大学人間総合科学研究科学校教育学専攻，pp. 41-58。
原口友輝（2014）「歴史的事例の探究を通じた道徳教育の可能性―『水晶の夜』を教える授業プランに着目して―」，『筑波大学道徳教育研究』第15号，筑波大学道徳教育研究会，pp. 33-42。
原口友輝（2015）「『移行期の正義』における歴史教育の可能性―参加の諸側面に注目して―」，西村春夫・高橋則夫編『修復的正義の諸相（RJ 叢書９）』成文堂，pp. 285-302。
原口友輝（2017）「多面的・多角的に考えさせる道徳授業―『杉原千畝』によるビザ発給の事例を中心に―」，『中京大学教師教育論叢』第６巻，pp. 1-34。
原口友輝（2019）「『歴史と私たち自身に向き合う（Facing History and Ourselves)』によるワークショップ『アラバマ物語を教える』の検討―社会的事実に基づいて多面的・多角的に考える道徳授業を目指して―」，『道徳と教育』第337号，日本道徳教育学会，pp. 39-49。
原口友輝（2021）「道徳授業において「困難な歴史」を取り扱うための教師支援に関する一考察――米国における「日系人強制収容」に関するワークショップの検討――」，『倫理道徳教育研究』第４号，日本倫理道徳教育学会，pp. 15-28。
McCully, A. & Reilly, J. (2017) History teaching to promote positive community relations in Northern Ireland: tensions between pedagogy, social psychology theory and professional practice in two recent projects, in C. Psaltis, M. Carretero & S. Cehajic-Clancy (Eds.): *History Education and Conflict Transformation: Social Psychological Theories, History Teaching and Reconciliation*, Cham: Palgrave Macmillan, pp. 301–320.
Shin, J., Warshauer, Freedman, S. W., Barr, D., & Murphy, K. (2021) Democratic civic engagement of adolescents in three divided societies: Northern Ireland, South Africa, and the United States, *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, pp. 1–18.
Schults, L. H., Barr, D. J., and Selman, R. L. (2001) “The Value of a Developmental Approach to Evaluating Character Development Programmes: an outcome study of Facing History and Ourselves,” *Journal of Moral Education*, 30, 1, pp. 3–27.
空健太(2018)「民主主義社会の市民の育成を目指した世界史の授業―Facing History and Ourselves によるレッスン『ワイマール共和国の政治と選挙』の場合―」，愛知県世界史教育研究会『世界史教育研究』第４号，2018年，pp. 57-64。
空健太（2022）「生徒の感情に関与することを重視する米国の歴史学習プログラム」，二井正弘編著『レリバンスの視点からの歴史教育改革論―日・米・英・独の事例研究―』風間書房，印刷中。
Tibbitts, F. (2006) Learning from the Past: supporting teaching through the *facing the past* history project in South Africa, *Prospects*, XXXVI, 3, pp. 301–304.
Tibbitts, F. L. & Weldon, G. (2017) History curriculum and teacher training: shaping a democratic future in post-apartheid South Africa?, *Comparative Education*, 53(3), pp. 442–461.
Weldon, G. (2015) South Africa and Rwanda: Remembering or Forgetting?, In *Teaching History and the Changing Nation State: Transnational and Intranational Perspectives*, edited by R. Guyver, London: Bloomsbury Academic, pp. 95–114.
周媛媛，尚媛媛（2019）「“Facing History And Ourselves”（面对历史和我们自己）――基于“人”的教育的多学科融合选修课程设计与实践」，陕西师范大学杂志社『中学历史教学参考』，2019年，第17期。

資料1：「『南京での残虐行為』を教える」の学習内容と活動の流れ[1]

≪ワークショップの指針となる問い≫

・個人や集団のアイデンティティを形成する上で、歴史はどのような役割を果たしているのでしょうか？
・日本と中国の間に「私たちとかれら」という関係が生まれたのはなぜでしょうか。その関係はどのように発展したのでしょうか？
・南京で行われた残虐行為のような難しい歴史を生徒に教えるにはどのようにすればよいでしょうか？
・中国と日本が共通の歴史に向き合う上で直面する課題とは何でしょうか？

≪ワークショップの目標≫

・南京での残虐行為の歴史的背景を提示する
・南京での残虐行為についての教材を紹介する
・困難な歴史を教えるための一つの教育モデルを紹介する

◆アイスブレイク：歩き回って他の参加者と以下の問いについて話し合う
　1．『南京での残虐行為』の目次の構成について、どのようなことに気付きましたか？
　2．目次について、どのような疑問を抱きましたか？
　3．今回のワークショップに参加した理由は何ですか？
◆スコープとシークエンス及びFHAOの教授目標の三角形の概略説明
◆上述の「指針となる問い」及び「目標」の簡単な説明

【個人と社会】

・個人や集団のアイデンティティを形成する上で、歴史はどのような役割を果たしているのでしょうか？
・関係する人たちのアイデンティティを検討することで、歴史的な出来事をよりよく理解するにはどうすればよいのでしょうか？

◆1956 年生まれで文化大革命時代に成人した中国人作家ハ・ジンの詩“The Past”（CONNECTING TO OUR PAST、第1章R1）[2]を基に「ラップ・アラウンド」活動[3]
　→全員、読んで心に残ったフレーズ・文を全体で各自一つずつ読み上げる活動
◆自分のアイデンティティ・チャート作成[4]　⇒ペアを作り各自紹介
◆全体で2つに分かれ、それぞれ以下の別々の文章を読む
　⇒グループ内で内容を共有
　⇒別の文章を読んだ参加者とペアで共有（シンク・ペア・シェア）
　　LEARNING ABOUT DIFFERENCE（第1章R6）：1934年3月スイス人の母と中国人の父の間に生まれ、日本占領下の北京で育ち、学校で周囲から「ハーフカースト」「外国人は悪だ」と罵られながら育ったマイケル・デビッド・クワンの体験記。

COMING OF AGE DURING WAR（第 1 章 R7）：終戦の前日に教師から「天皇陛下に死ねと言われたらどうするか」と言われ、「先生、私は腹を切って死にます」と答えていた大江健三郎が、終戦の思い出とその後の人生への影響を語った文章。

【新興国：中国と日本】

・日本と中国の間に「私たちとかれら」の関係が、どのように、なぜ生まれたのでしょうか？

◆動画視聴：「中国と日本：隣人、友人、敵対関係」[5]

→日本と中国の関係を素描したもの

◆以下の写真に基づき当時の日本と世界の時代状況について簡単な問いかけと説明：French Cartoon[6]、Japanese Woodblock Print[7]、Children's Kimono[8]

◆全体を 3 グループずつに分け、別々の資料について「精読（Close Reading）」の活動

⇒昼休憩後、「ファウンド・ポエム」（文章中の言葉だけで詩を作成）の活動[9]

孫文：1924 年に神戸で行った「大アジア主義」の演説[10]

橋本欣五郎：1939 年に行った日本の領土拡大と満州侵略を主張する演説[11]

【南京での残虐行為】

・南京での残虐行為のような困難な歴史をどのように教えるのでしょうか？

・南京での残虐行為は、戦争とその民間人への影響について、どのような道徳的・倫理的問題を提起しているのでしょうか？

◆年表（1937-1938）の配布・提示、ジョン・ラーベの説明など

◆動画視聴：「南京の残虐行為：戦時中の犯罪」[12]

→現代中国の歴史研究者であるラナ・ミッター教授による、南京の包囲のプロセスと残虐行為に至った原因の分析についての説明

◆「南京安全区」についての説明

◆ジョン・ラーベ等外国人救援者（5 章 R1、R5）や中国人の救援者（5 章 R2）、日本の指揮官の規律の欠如（4 章 R3）など、多様な視点を取り上げた資料とその活用の仕方の紹介（ジグソー法を使用）

◆現地の日本兵の日記や詩、捕虜の手紙を取り上げた VOICES OF SOLDIERS（4 章 R6）を読み、「ジャーナル・リフレクション」（個人で学んだこと等を書き出す）活動[13]

⇒グループ内及び全体で共有

【裁判（判断）、遺産、記憶】

・第二次世界大戦と南京で行われた残虐行為は、中国と日本の双方にどのような影響を与えているのでしょうか？

・中国と日本は、共通の歴史に向き合う上で、どのような課題に直面しているのでしょうか？

◆年表の提示と事実確認

◆動画視聴：「東京裁判：序章」[14]

→東京裁判と「平和に対する罪」「人道に対する罪」について研究者による説明

---

[1] 配布資料と提示資料（後日送付）に基づき筆者が作成した。細かな説明や具体的な活動内容などは省略した。

[2] 資料集『南京での残虐行為』に所収されている文章については「○章 R ○」（R は Reading の略）と表記する。

[3] https://www.facinghistory.org/resource-library/teaching-strategies/wraparound （2022.1.9）

[4] 自分が何によって構成されているかを考えるもので、FHAO プログラムで最も使用される序盤の学習活動である。詳しくは以下の HP、及び原口（2019）、空（2018）を参照。
https://www.facinghistory.org/resource-library/teaching-strategies/identity-charts （2022.1.6）

[5] China and Japan: Neighbors, Friends, Enemies：
https://www.facinghistory.org/resource-library/video/china-and-japan-neighbors-friends-enemies （2021.12.31）

[6] 諸外国が中国を分割しようとしていて日本がそれを眺めているという有名な漫画の絵：
https://www.facinghistory.org/resource-library/image/imperialism-cartoon-1898?backlink=https://www.facinghistory.org/resource-library?search=French%20Cartoon （2021.12.31）

[7] 力士が擬人化した諸外国を投げ倒している絵：
https://www.facinghistory.org/resource-library/image/japanese-woodblock-print-1861?backlink=https://www.facinghistory.org/resource-library?search=Japanese%20Woodblock%20Print （2021.12.31）

[8] 戦車や戦闘機の絵が描いてある着物の写真：
https://www.facinghistory.org/resource-library/image/childs-kimono?backlink=https://www.facinghistory.org/resource-library?search=Children%E2%80%99s%20Kimono （2021.12.31）

[9] ファウンド・ポエムについては以下の HP を参照。拙稿でも論じた（原口2019）。
https://www.facinghistory.org/resource-library/teaching-strategies/found-poems （2022.1.9）

[10] RESTORING THE STATUS OF ASIA（３章 R9）

[11] A CASE FOR JAPANESE EXPANSION（３章 S5）

[12] The Nanjing Atrocities: Crimes of War：
https://www.facinghistory.org/resource-library/video/nanjing-atrocities-crimes-war （2021.12.31）

[13] たとえば、ジャーナル・リフレクションのなかでも2 points/ideas, 1 question という方法が提示されていた。興味深いと感じた点を２つ、抱いた疑問を１つ書きなさい、という活動である。

[14] https://www.facinghistory.org/resource-library/video/tokyo-trial-introduction （2021.12.31）

資料２：「『夜を教える』ワークショップ」の学習内容と活動の流れ[1]

≪参加者が達成すること≫

ワークショップの参加者は、

・生徒が感情的にパワフルな材料を処理するための、多様な教授法を学ぶ

・教室ですぐに使えるマルチメディアツールや資料について学ぶ

・ティーチングガイドの本を受け取る

≪ワークショップの目標≫

1．「歴史と私たち自身に向き合う」を紹介する

2．回顧録「夜」の教材を紹介する

3．歴史的回顧録を教えるための教育学的・テーマ的アプローチを紹介する

≪中心となる問い≫

・私たちのアイデンティティは、遭遇する状況によってどのように形成され、再形成されるのでしょうか？

・トラウマや悲劇は、人間のアイデンティティや主体性の感覚にどのような影響を与えるのでしょうか？

◆アイスブレイク：歩き回って他の参加者と以下の問いについて話し合う

1. なぜこのワークショップに参加しようと思ったのですか？

2. 『夜』とホロコーストについてどの程度知っていますか？

◆ワークショップの目標の紹介（上述）

◆スタディガイド『「夜」を教える』の目次を見る

⇒新しさ、面白さ、疑問などについて参加者同士話し合う

◆学習者と教師としての「二つの帽子」の視点を説明[2]

◆上述の「中心となる問い」の紹介

◆オルテガの言葉「私とは、私と私の環境である」について、以下の問いを考える

・この言葉の意味は何だと思いますか？

・自分の人生の中で、この言葉が思い出されるような例はありますか？

⇒近くの参加者同士、ペアで共有

【個人と社会】

・個人と社会はどのような関係にあるのでしょうか？

・社会や環境は私たちのアイデンティティをどのように形成するのでしょうか？

◆少年時代のエリ・ヴィーゼルのアイデンティティ・チャートを作成

⇒グループ内で共有　⇒別のグループと共有

◆ヴィーゼルの出身地である戦前のシゲト（ハンガリー）の街の写真を見る[3]

⇒ヴィーゼルについて新たに知ったことについてグループ内で共有

【歴史的文脈】

・『夜』とホロコーストの歴史的文脈：回顧録『夜』はホロコーストの歴史の中でどこに位置するのでしょうか？

◆『夜』の歴史的背景の説明（時期、ハンガリーのユダヤ人の犠牲者の数など）

◆ホロコースト研究者ラウル・ヒルバーグの「ホロコーストの六段階」に関する資料を読む

⇒グループで考えたことを共有

◆アレクサンドラ・ザプルーダー著 *Salvaged Pages*（Yale University Press, 2015）[4]（ホロコースト時代のゲットーにいた若者の日記集）の紹介

◆動画視聴：I'm Still Here[5]の一部

→*Salvaged Pages* に基づいて制作されたドキュメンタリー映画（銃殺シーンや死体を運ぶシーンなど、残酷な映像を含む）

⇒FHAO の「教授目標の三角形」に基づいて感じたこと、考えたことを記入

知的反応：これらの画像からアウシュビッツについて何を学ぶことができますか？

感情的反応：これらの画像はどのような感情や反応を引き起こしますか？

倫理的内省：これらの画像はどのような疑問（倫理的、道徳的）を提起しますか？

⇒グループ内で共有

⇒全体で「このような映像を取り上げるかどうか、どう取り上げるか」について議論

～昼休憩～

◆講演：戦時中の日記を教える（香港ホロコースト・トレランスセンターの研究者サイモン・リー氏による）

・図書：*The Diary of Dawid Sierakowiak: Five Notebooks from the Lodz Ghetto*（London：Bloomsbury, 1997）を基に、ウッチゲットーの話、写真の解説など

・ホロコースト・サバイバーの Ellis Lewin のインタビューと彼の言葉の紹介

【アウシュビッツ・ビルケナウ】

・アウシュビッツとは何だったのか、そしてそこに連れて行かれた人々にとってアウシュビッツとは何を意味したのかを理解するために、ヴィーゼルの記述はどのような洞察を与えてくれるのでしょうか？

◆アウシュビッツについての 6 枚の写真を見て[6]、学習活動「見る―考える―疑問を抱く」

→写真には何が写っているか、そこからどんな情報を得ることができるか、それらはどんな疑問を生じさせるか、を考える活動

⇒グループ内で共有　⇒全体で共有

◆『夜』34 ページの詩（Never shall I forget...）を読み、最も心に残った一文を選ぶ

⇒それを選んだ理由と共に、グループ内で共有

【記憶と責任】

・ホロコーストはどのように記憶されていますか？

・なぜこの歴史を記憶することが重要なのでしょうか？

◆『「夜」を教える』にあるヴィーゼルの言葉の引用（p.89）を参加者が読み上げる

◆動画視聴：「私たちは牢獄を破るために言葉を使うのだろう：エリ・ヴィーゼル、『夜』を書く」[7]

➔『夜』についてのエリ・ヴィーゼルの講演（なぜ書いたのか、どのように書いたのか、なぜその後も書き続けているのか、読者はこの本に続けて他の本も読み続けてほしい、といった内容）

⇒グループ内で、どんなことが頭に残ったか話し合う　⇒全体で共有

◆動画視聴：「ベンジャミン・フェレンツ：天空の番人」[8]

➔ニュルンベルク裁判の元検事であり、大規模な残虐行為の防止に尽力するベンジャミン・フェレンツのドキュメンタリー動画。（第二次大戦での彼の最後の任務は、強制収容所に入って戦犯裁判のための証拠を集めることだった。）

---

[1] 配布資料と提示資料（後日送付）に基づき筆者が作成した。細かな説明や具体的な活動内容などは省略した。

[2] 他のワークショップを分析した拙稿でも論じた（原口2019）。

[3] 『「夜」を教える』pp.12-20.

[4] https://www.facinghistory.org/books-borrowing/salvaged-pages　（2022.1.2）

[5] https://www.facinghistory.org/resource-library/video/im-still-here　（2022.1.2）

[6] 『「夜」を教える』pp.50-55.

[7] We May Use Words to Break the Prison: Elie Wiesel on Writing Night：
https://www.facinghistory.org/resource-library/video/we-may-use-words-break-prison-elie-wiesel-writing-night　（2022.1.3）

[8] Benjamin Ferencz: Watcher of the Sky：
https://www.facinghistory.org/resource-library/video/benjamin-ferencz-watcher-sky